日本生態学会
ニュースレター
No.17
2009年1月

［目 次］

男女共同参画学協会連絡会第６回シンポジウム参加報告 1

記事

Ⅰ．日本生態学会の法人申請延期について 4
Ⅱ．全国委員会承認事項 4
Ⅲ．書評依頼図書 4
Ⅳ．寄贈図書 4
Ⅴ．後援・協賛 5
Ⅵ．地区会報告 5

お知らせ

1．第 29 回（2009 年）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ 13
2．第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ 13

書評 13
京都大学生態学研究センターニュース 17

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月から 12 月までです。
新年度の会費は 12 月に請求をします。会費未納者に対しては 6 月、9 月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256　口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費滞納 2 年で会誌の発送停止となり、3 年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research ＋生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員（選挙・被選挙権）		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については 2007 年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900 円、生態誌 600 円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は 2010 年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）
北海道地区：200 円　東北地区：800 円　関東地区：600 円　中部地区：0 円
近畿地区：400 円　中国・四国地区：400 円　九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局
〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
Tel&Fax 075-384-0250　E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

男女共同参画学協会連絡会第６回シンポジウム参加報告

将来計画専門委員会

男女共同参画学協会連絡会（以下「連絡会」と略記、http://annex.Jsap.or.jp/renrakukai/）主催の第 6 回シンポジウムが、2008 年 10 月 7 日（火）に京都大学百周年時計台記念館で開催された。日本生態学会からは、奥田昇（将来計画専門委員）、可知直毅（将来計画専門委員長）、半場祐子（常任委員）、湯本貴和（将来計画専門委員）の 4 名が参加した。

今回のシンポジウムのテーマは「科学・技術の成熟と新たな創造をめざして―第 2 回連絡会アンケート調査報告から学ぶもの―」である。2002 年に実施された第 1 回アンケートは、第 3 次科学技術基本計画に男女共同参画推進に関連する項目を盛り込むための基礎情報として大きな影響力を発揮した。第 2 回のアンケートも今後、内閣府や文科省等による男女共同参画や若手研究者支援推進の施策に大いに貢献するものと期待される。

これらの施策には、女性研究者を積極的に支援する数値目標を掲げたものもある。ポスドククラスのキャリア形成と就職問題は、男女を問わず深刻な状況である。「女性優遇策は、男性ポスドクにとって逆差別である」という意見も聞かれる。男女間に能力の差があるとは思えないので、結果として女性研究者（特に、教授など職位の高い研究者）の女性割合が少ないのは、女性研究者が男性研究者に比べて研究遂行やキャリア形成の面で不利な状況にあるというのがありそうな仮説であろう。これらの不利な面を改善していけば、理論的には「数値」は後からついてくるはずである。それでは、具体的に女性研究者はどのような点で不利なのだろうか。これが一朝一夕に行かない（制度上の問題だけではない）ことは、昨年のシンポジウムの参加報告で述べた（ニュースレター No 14, 2007）。

連絡会は 2002 年 10 月に自然科学系の学協会が連携して発足し、2008 年 10 月現在 38 の学協会が正式加盟し、29 の学協会がオブザーバーとして参加している。これらの学協会に所属する会員の総数は約 41 万人、そのうち女性会員は約 2 万人（5%）である。日本生態学会は 2003 年に連絡会に加盟した。日本森林学会、日本進化学会、日本動物学会、種生物学会も正式加盟学会である。

以下、午前中の 2 つの分科会と午後の全体会について報告する。なお、シンポジウムの詳細な報告は、上記連絡会のウエブサイトに掲載される予定である。（報告者：可知直毅）

分科会 A「生と性を考える」

前半は慶応大学の松本緑氏より「生物におけるワークライフバランス」と題して、プラナリアにおける生殖方法と寿命との関係や、は虫類や魚類の生殖方法と雄・雌の決定との関係などについて紹介があった。後半はルイ・パストゥール医学研究センターの宇野賀津子氏より、「20 世紀科学の発展と女性のライフサイクルの変化」と題した講演が行われ、科学技術の発展に伴って、女性のライフサイクルにおいて子育てが占める比率が大幅に低下したという報告があった。どちらの講演においてもフロアから多くの質問や意見が出され、活発な質疑が行われた。

京都工芸繊維大から修士 2 年の女子学生が参加したが、午後のセッションについて「女性研究者の数が意外に少ないのに驚いた」「産休や育休がとれないのでは続けるのは大変であろう」「しかしいろいろ前向きな取り組みがなされていると感じられる」「ポスドクは非常に大変そうである」という感想であった。この学生の母親は看護士で、ずっと継続して病院に勤務しているため、研究の世界で出産や育児支援が不十分であることがむしろ意外だったようである。（報告者：半場祐子）

分科会 B「子育ては保育園では終わらない―大きくなった子供たち」

子育てする女性研究者の支援事業は、主に乳幼児を持つ研究者を対象に行われている。本分科会では、これまで社会や家庭での理解が得られにくかった就学児童の子育てにまつわる諸問題を取り上げ、今後の男女共同参画の取り組みに活かそうとの趣旨で開催された。私事であるが、つい先日、子を授かった一父親としても大変興味深いプログラムであった。本報告が、これから親となる、あるいは、すでに乳幼児を抱える若手研究者の皆さんの参考になれば幸甚である。

まだ育児を経験したことのない若手研究者の中には、育児が最も大変なのは身の回りの世話が必要な乳幼児期だと考える人も少なくないだろう（私もその一人であった）。実際、子供が就学すると子育てへの関与が希薄になる父親は多いらしい。しかし、共働き家庭にとって、就学児童の放課後の「居場所」を確保することは、そう簡単ではない。一昔前なら、学校が終わった子供は暗くなるまで外で遊ばせておけばよかったわけだが、物騒な事件が紙面を賑わす昨今、「居場所」の確保は一筋縄でいかないようだ。

このような社会事情を反映して、現在、大学や地方自治体にも小学校低学年を対象とした学童保育の場が整備されつつある。しかし、単に学童保育が設置されれば良いというわけではない。小学校低学年と言えば、他者とのコミュニケーションを通じて自我が芽生え、人格を形成していく大切な時期である。親の都合で見知らぬ子供たちばかりの学童施設に押し込められたくないと感じる子も多いらしく、ここに親子間の葛藤が生じるわけである。

研究者を親に持つ子供たちの意識調査を行っている演者が語られた自らの家庭内でのエピソードはとても印象的だった。その方の高校生になるお子さんは「ぐれて」しまったらしいが、母親である演者に対してこう言ったそうだ「男女共同参画とかいって、自分たちが働くことばかり考えて、私のことは何も考えてくれない」と。これまでの男女共同参画の盲点、それは研究者としての平

等な権利を勝ち取ることばかりが強調され、子供の都合を蔑ろにしてきたことではなかろうか。子供の人権にも配慮した家庭環境作り、そして、それを支援する社会の体制作りを真剣に考えてゆかねばならないと痛感させられた。（報告者：奥田昇）

全体会議

午後の全体会議では、まず京都大学 iPS 細胞研究センター長の山中伸弥氏による特別講演があった。山中氏は、神戸大学医学部卒業後、整形外科の研修医となったが、指導を受けた先生が怖かったこと（いじめに近い）、手術の腕が悪かったことなどから「基礎医学に逃避」したのがそもそも研究をはじめたきっかけであったそうだ。ノックアウトマウスの技術を学びたくてアメリカの研究機関にたくさん手紙を書いたが、自分の実績がないこともあって返事があったのはひとつだった。たまたまその研究所に行ったところ、順調に研究が進展した（研究の楽しさを味わった）そうだ。その後、子供が小学校にはいるタイミングで家族に帰国されてしまい、自分も仕方なく日本にもどってきたが、研究環境が劣悪でうつ状態になってしまったとのことだった。基礎はあきらめて整形外科医の道にすすむことを真剣に考え、もしこれがだめならそうしようと応募した奈良先端大の助教授になぜか採用されてしまい、基礎研究を続けざるをえなくなった。奈良先端大で、現在の iPS 細胞の研究の基礎を築き現在に至ったそうだ。山中氏が、様々な挫折を経験していることを知り親近感を覚えた。また、実際に研究に携わった学生や研究協力者を褒め、自分自身のことは自慢しないしゃべり方に好感を持った。

次に、「第 2 回学協会アンケート調査と女性研究者・技術者支援の課題」として、アンケート調査作業部会のメンバー（豊島陽子氏、澤邊知子氏、吉江尚子氏）と提言委員長の大坪久子氏による報告があった。第 1 回調査に比べ、仕事を自宅に持ち帰る傾向がみられたこと（在職場時間が 2 時間減り、在宅仕事時間が 2.3 時間増えた）、女性を優遇する数値目標には賛否両論があったこと、男性に比べて女性が育児に費やす時間が多いこと（キャリア形成に不利）、年齢とともにポスドクの女性割合が増えること、育児休業をとることに対して、教授クラスは比較的寛容だが、当事者のポスドクは躊躇する傾向があることなどが紹介された。大坪氏は、女性支援の基盤整備に加え、女性研究者のリーダーを育てることの重要性を強調した。質疑応答で、フロアの男性若手研究者から「女性を対象にした支援だけでなく、男女を問わずポスドク全体の問題も強調してとりあげてほしい」という意見が出されたが、その場では議論がかみ合わなかった（その後、個人的に意見交換されたとのこと）。男女共同参画のなかで最もデリケートな問題であると感じた。（報告者：可知直毅）

パネル討論「若手研究者の明日を切り開くために」

「若手研究者の明日を切り開くために」と題されたパネル討論会では、実際にキャリアの確立と子育ての時期が重なる若手研究者を支援するための具体的な制度の話題が中心となった。

まず、日本学術振興会の大城功氏が「日本学術振興会特別研究員―RPD について」と題して、平成 18 年度から始まった RPD（Restart Post Doctoral Fellowship）の制度についての説明があった。申請年度初めから遡って 5 年間のうちに、子育てなどで半年程度のブランクのあった学位取得者（文化系ではそれに準ずる）が対象者で、2 年間にわたって PD と同額の支援が得られるというものである。討論では、研究復帰間もなく 2 年間というのは急で短すぎるので、せめて同じ総額の給付を 3 年間分割で緩やかにもらえるシステムを選べるように工夫できないかという提案があった。ちなみに、2008 年度の内定者 45 名のうち 5 名は男性である。

つぎに広島大学の田島文子氏がご自身のアメリカでの研究経験に即して「上級技術者（スペシャリスト）ポスト拡充を提案する」というお話があった。ポスドクから助教や准教授などへの移行が数的に狭い門である現在、大型プロジェクトを支える実験やコンピュータのスペシャリストポストの拡充こそが、若手の新たなキャリアパスとして有望であるとともに、大型施設や装置に比べて人的インフラが手薄な研究環境を強化する意味でも「仕組みと文化をつくっていく」ことが必要であることを力説された。しかし、会場からは、新たな不安定な雇用の一形態をつくるに過ぎないのではないかという懸念の声が挙がっていた。

最後に北海道大学の有賀早苗氏が「Dual Career を支える同居支援策をどう進めるか」について、北海道大学の取り組みを紹介した。女性研究者のパートナーの 5 〜 6 割以上が研究者（逆は 1 割程度）であることを踏まえ、北海道大学では若手カップルの同居支援策として女性研究者支援室客員准教授というポストを設け、パートナーが北大教員で、北大に受け入れ研究室を得られる若手研究者を採用した。週 30 時間を支援室勤務としてあとは研究に充てることができ、科研費にも応募できる明確な身分である。現在、文科省振興調整費を財源としているが、それが切れる来年度からは総長裁量経費を充当させて維持する見込みとのこと。研究者どうしのカップルの場合には、近在に揃って働ける職場がみつけられるのが首都圏や京阪神に限られるため、とくに地方大学では真剣に検討すべき制度であるが、一大学単独ではなく大学・研究機関の地域ネットワーク構築が課題であること、また運用の公平性の確保が重要であるという議論が紹介された。

任期制のポスドクが不安定雇用であることに起因する将来への不安が結婚や出産に大きな障害となっているという第 2 回大規模アンケートの結果を踏まえた具体策の検討であったが、行政改革で人員整理が進むなかで、それに逆行するどのような突破口が可能なのか、依然として明確な方針は得られていないというのが率直な印象である。純増など新たな資金投入を求めるのも重要ではあるが、たとえば教授職 1 を任期なしの助教職 2 に振り替えるなど、ゼロサム状況下での工夫を考える「条件闘争」も視野に入れるべきではないだろうかという感想をもった。（報告者：湯本貴和）

各種報告およびポスターセッション

パネル討論に続いて、連絡会の活動報告、新規加盟学会の紹介、次期連絡会運営委員会幹事学会の電気情報通信学会の挨拶があった。ポスターセッションでは、連絡会加盟学協会の活動の紹介、科学技術振興調整費による「女性研究者支援モデル育成」に採択された大学・研究機関の取組みの紹介等があった。また、連絡会が主催した 2008 年度「女子中高校生夏の学校：科学・技術者のたまごたちへ」について報告があった。なお、生態学会は、夏の学校で実施された「実験・実習」のうち唯一の野外実習として「野鳥の森自然観察」を担当した。（報告者：可知直毅）

記　事

Ⅰ．日本生態学会の法人申請延期について

会長　矢原　徹一

日本生態学会では、2008 年 12 月の法人格取得申請をめざして準備を進めてきました。しかし、公益法人に関する新しい法律の下での制度の運用に関しては、まだ不確定な要素が多いため、法人格取得申請を 1 年間延期します。

2008 年 12 月 1 日に、公益法人制度改革に関する 3 つの法律(「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」、「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」及び「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」) が施行されました。新制度の下で法人格の取得と公益性の判断が分離された結果、登記をすれば「一般社団法人」または「一般財団法人」を設立できます。公益社団法人としての認定を受けるためには、一般社団法人を設立したうえで、事務局がおかれている自治体（生態学会の場合には京都府）の「民間有識者からなる委員会」に対して公益認定申請を行なうことになります。

日本生態学会では、公益認定を申請する方向で準備を進めてきましたが、公益認定申請後の審査に関しては、各自治体の「民間有識者からなる委員会」の判断にゆだねられている部分があります。また、新しい法律の下での公益法人の運営に関しては、学会の運営になじみにくい部分があることも指摘されています。このため、すでに法人格を取得している学会の間では、新しい法律の下での公益認定申請を急がずに状況を見る動きがひろがっています。このような状況の下で、まだ社団法人格を取得していない日本生態学会が、法人格取得を急ぐ必要はないと判断されます。

今後、新制度の下での運用実績を検討しながら、ひきつづいて法人格取得申請に向けて綿密な準備を進めることにします。

Ⅱ．全国委員会承認事項

1. 次期保全生態学研究編集委員会

（任期：2009.4 ～ 2011.12）

編集委員長	角野　康郎	
編集幹事	西廣　淳	三橋　弘宗
編集委員	石井　実	石濱　史子
	井上　幹生	植田　睦之
	梅原　徹	加藤　真
	角谷　拓	河口　洋一
	倉本　宣	小池　裕子
	小池　文人	高槻　成紀
	舘野　正樹	中越　信和
	中丸　麻由子	長谷川雅美
	長谷川眞理子	早矢仕有子
	藤井　伸二	増田　理子
	松田　裕之	山本　智子
	湯本　貴和	鷲谷　いづみ

2. 学会賞受賞者の決定

第 7 回日本生態学会賞

和田　英太郎（独立行政法人海洋研究開発機構フロンティア地球環境研究センター）

加藤　真（京都大学大学院人間・環境学研究科）

第 2 回日本生態学会大島賞

綿貫　豊（北海道大学水産科学研究院准教授）

第 14 回日本生態学会宮地賞

岸田　治（京都大学生態学研究センター）

西川　潮（国立環境研究リスク研究センター）

森　章（横浜国立大学大学院環境情報研究院）

Ⅲ．書評依頼図書（2008 年 5 月～ 2008 年 12 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 本川雅治編「日本の哺乳類学①　小型哺乳類」(2008) 320pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-064251-4
2. Takayuki Ohgushi, Timothy P. Craig and Peter W. Price「Ecological Communities Plant Mediation in Indirect Interaction Webs」(2008) 444pp. CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS　ISBN:0-521-85039-8
3. 高槻成紀・山極寿一編「日本の哺乳類学②　中大型哺乳類・霊長類」(2008) 480pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-064252-1
4. 出川通著「『理科少年』が仕事を変える、会社を救う」(2008) 192pp. 彩流社　ISBN:978-4-7791-1032-0
5. 長谷川順一著「栃木県の自然の変貌」(2008) 182pp. 自刊
6. 加藤秀弘編「日本の哺乳類学③　水生哺乳類」(2008) 296pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060189-4
7. 多田多恵子著「身近な植物に発見　種子たちの知恵」(2008) 160pp. NHK 出版　ISBN:978-4-14-040230-6
8. 田中宏一著「野鳥に魅せられて」(2008) 228pp. ほおずき書籍　ISBN:978-4-434-12410-5
9. 安藤元一「ニホンカワウソ　絶滅に学ぶ保全生物学」(2008) 238pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060189-4
10. 栗原康著「生態システムと人間」(2008) 138pp. 東北大学出版会　ISBN:978-4-86163-104-7
11. 桜井英博・柴岡弘郎・芦原坦・高橋陽介共著「植物生理学概論」(2008) 230pp. 培風館　ISBN:978-4-563-07806-5

Ⅳ．寄贈図書

1. 「多摩川　第 119 号」(2008) 8pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
2. 「『団体組織の概要と運営状況についての全国調査』

アンケート集計分析結果」(2008) 18pp. 東京海上日動火災保険株式会社
3. 「東レ科学振興会　第 48 回事業報告書」(2008) 138pp. 財団法人東レ科学振興会
4. 「SESSILE ORGANISMS　第 25 巻 2 号 」(2008) 126pp. 日本付着生物学会
5. 「花の万博記念「コスモス国際賞」第 15 回記念事業　報告書」(2008) 138pp. 財団法人国際花と緑の博覧会記念協会
6. 「食と緑の科学　62」(2008) 114pp. 千葉大学大学院園芸学研究科
7. 「うみうし通信　No.60」(2008) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
8. 「学術会議叢書 15　医療を崩壊させないために」(2008) 180pp. 日本学術協力財団
9. 「日本学士院ニュースレター　第 2 号」(2008) 20pp. 日本学士院
10. 「財団法人下中記念財団 2008 年報」(2008) 80pp. 財団法人下中記念財団
11. 「東京大学海洋研究所　ニュースレター 17」(2008) 16pp. 東京大学海洋研究所
12. 「CIC NEWSLETTER　NO.6 2008」(2008) 8pp. 東京大学海洋研究所
13. 「(財) 鹿島学術振興財団　第 32 回　2007 年度年報」(2008) 364pp. 財団法人鹿島学術振興財団
14. 「多摩川　第 120 号」(2008) 8pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
15. 「提言　学術分野における男女共同参画促進のために」(2008) 96pp. 日本学術会議科学者委員会男女共同参画分科会
16. 「女性研究者を応援します―女性研究者の活躍推進のための取組事例―」(2008) 88pp. 内閣府男女共同参画局

Ⅴ. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 「女子中高生夏の学校 2008 ～科学・技術者のたまごたちへ～」
   主催 : 文部科学省・独立行政法人国立女性教育会館・男女共同参画学協会連絡会
   実施期間：平成 20 年 8 月 14 日～ 16 日
   会場：国立女性教育会
2. 第 1 回国際北極研究シンポジウム
   「First International Symposium on the Arctic Research (ISAR-1)」
   主催：日本学術会議 地球惑星科学委員会 国際対応分科会、日本学術会議 環境学委員会 IGBP/WCRP 合同分科会および国際北極シンポジウム実行委員会
   開催期間：2008 年 11 月 4 日～ 6 日
   開催場所：日本科学未来館 みらい CAN ホール
3. グローバル COE「アジア視点の国際生態リスクマネジメント」中間成果報告シンポジウム―環境における「不都合な真実」―
   主催：横浜国立大学
   日時：2008 年 12 月 12 日
   会場：国際連合ウタント国際会議場

Ⅵ. 地区会報告

北海道地区会（2007 年 9 月 1 日－ 2008 年 8 月 31 日）

(1) 2007 年度役員会を開催した。
開催日：2008 年 2 月 23 日（土）
場　所：札幌市、北海道大学・地球環境研究院
出席者：紺野康夫、齊藤隆、原登志彦、隅田明洋、小野清美
議題
1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定（地区大会）
4. その他
以上の件について審議の上、了承された。

(2) 2007 年度地区大会・総会を開催した。
開催日：2008 年 2 月 23 日（土）
場　所：札幌市、北海道大学・地球環境研究院

【若手研究発表】
「帯広市南部の分断林における野ネズミ 3 種（エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、ヒメネズミ）の分布とその決定要因」渡邊淳之介（北大・環境科学）・紺野康夫（帯広畜産大）・石橋靖幸（森林総合研究所）・齊藤隆（北大・FSC）
「半島マレーシアの熱帯多雨林における樹木 200 種の樹冠構造の種間変異」矢澤佳子（北大・環境科学）・久保拓弥・甲山隆司（北大・地球環境）
「ミズナラ林冠木個体に対する全切葉が植物の変化を介して植食性昆虫群集に与える間接効果：2 年間の経過」小暮慎一郎（北大・環境科学）・中村誠宏（北大・苫小牧研究林）
「コゲラ *Dendrocopos kizuki* の巣穴及びねぐら穴に利用される樹木」椎名佳の美・東正剛（北大・環境科学）
「群集動態の予測可能性と空間スケール依存性」深谷肇一（北大・環境科学）・仲岡雅裕・熊谷直喜・島袋寛盛（千葉大・自然科学）・山本智子（鹿児島大・水産）・堀正和（瀬戸内水研）・野田隆史（北大・地球環境）
「石狩浜における海浜草本植物の成長・繁殖・資源獲得様式について」稲葉遥子（北大・環境科学）
「支笏湖沿岸域における底生動物群集の季節動態」望月成・斎藤裕美（北海道東海大学・工学部）
「泥炭採掘跡地における優占種の実生定着およびシードバンク発達様式」江川知花（北大・環境科学）
「ほ乳類の生息地選択に対する台風攪乱の影響」山崎明信（北大・農・森林生態系管理学）
「谷地坊主が形成する微環境における種子発芽及び実生生存特性」小山明日香（北大・環境科学）
「マイクロサテライト DNA を用いたアカネズミの配偶システムの解析：乱婚の指標としてのマルチプルパタニティ」野田悟志（北大・環境科学）・齊藤隆（北大・FSC）

「開所に生育する落葉広葉樹 13 種の頂部当年枝特性の樹高依存性」宮田理恵（北大・環境科学）・久保拓弥・甲山隆司（北大・地球環境）
「エゾサンショウウオ幼生の環境変化に応じた異なる体色パターン」浅野由佳理（北大・水産）・岸田治（京大・生態学研究センター）・西村欣也（北大・水産科学）
「岩礁潮間帯固着動物群集における種多様性の緯度勾配の空間スケール変異性：生態プロセスの影響の検証」奥田武弘（北大・環境科学）・野田隆史（北大・地球環境）・山本智子（鹿児島大・水産）・堀正和（瀬戸内水研）・仲岡雅裕（千葉大・自然科学）
「富栄養化が捕食者の絶滅リスクを下げる状況を発生させる―被食者が捕食者の死骸を摂取するモデルにて―」野崎開太（北大・水産）・西村欣也（北大・水産科学）
「種内捕食－被食相互作用における対抗的表現型可塑性」井川拓也（北大・水産科学）・岸田治（京都大・生態研セ）・西村欣也（北大・水産科学）
「石狩低地帯におけるエゾクロテンとホンドテンの側所的分布－自動撮影法と糞 DNA 分析による確認」坂田大輔・東正剛（北大・環境科学）

【一般講演】
「生態学的思考」小野山敬一（第 n 宇宙系第 i 銀河系第 k 太陽系地球村）
「高山植物ミヤマキンバイのハビタットに応じたエコタイプ分化の起源」平尾章（北大・地球環境）・下野嘉子（農環研）・池田啓（京大・人間環境）・和田直也（富山大・極東地域センター）・工藤岳（北大・地球環境）
「釧路湿原北斗にみられる湧水辺植生の種組成と立地」佐藤雅俊（帯畜大・環境総合科学）
「鳥類の保全医学研究拠点としての酪農学園大学野生動物医学センター WAMC と最近の疫学調査事例の紹介」浅川満彦（酪農学園大学獣医学部感染・病理部門／野生動物医学センター WAMC）
「GPS テレメで見る越冬期のヒグマの行動（予報）」小平真佐夫・中西将尚・葛西真輔・岡田秀明・山中正実（知床財団）
＊奨励賞に、小暮慎一郎（北大・環境科学）、野崎開太（北大・水産）、矢澤佳子（北大・環境科学）の 3 名を選び、賞状と寸志を送った。

【総会】
議題
1. 本年度活動報告
2. 会計報告
3. 来年度活動予定
4. その他

2008 年 1 月 1 日より、地区会事務局を北海道大学低温科学研究所に移した。なお、役員の任期は従来 1 月 1 日より 2 年後の 12 月 31 日としていたが、毎年 2 月に行われる地区大会事務に対応するなどの理由のため、今後は 4 月 1 日から 2 年後の 3 月 31 日までとすることを総会に諮り、承認された。ただし、現役員に限っては 2008 年 1 月 1 日より 2009 年 3 月 31 日までを任期とすることとなった。なお、会計年度については従来通り 1 月 1 日から 12 月 31 日までとする。

(3) 第 58 回日本生態学会札幌大会会場として、2011 年 3 月 10 日（木）～ 3 月 14 日（月）の日程で札幌コンベンションセンターを原登志彦地区会長の名前で 2008 年 4 月 9 日に仮予約し、全国委員である齊藤隆氏に連絡した。
(4) 北海道大学大学院に所属する院生より、2009 年 2 月 28 日、3 月 1 日に予定の学生企画型研究会『北海道若手生態学研究会』（旧 進化植物研究会）に対する日本生態学会北海道地区会による共催依頼があり、地区委員に諮ったうえこれを承認した。この研究会開催費用として、地区会費から 26 万円程度（詳細は未定）を 2009 年度会費より補助する予定である。

東北地区会

(1) 東北地区会第 52 回大会を開催
開催日：2007 年 11 月 24・25 日
会場：福島大学

【公開シンポジウム】（11 月 24 日）
「東北地方の侵略的外来生物問題―その被害と対策―」
第 1 部　侵略的外来生物問題の被害と対策
「侵略的外来生物問題基礎知識・水辺の侵略的外来植物問題と駆除の試み」黒沢高秀（福島大・共生システム理工）
「福島県の外来魚問題と対策」佐久間徹（福島県内水面水産試験場）
「ダム湖における外来魚駆除」浅見和弘 *[1]・大杉奉功 [2]・五十嵐崇博 [2]・西田守一 [1]・矢沢賢一 [3]（[1] 応用地質（株）・応用生態工学研, [2]（財）ダム水源地環境整備センター, [3] 国土交通省・東北地方整備局・三春ダム管理所）
「福島県松川浦におけるサキグロタマツメタ移入の経緯と現状」佐藤利幸（福島県水産試験場・相馬支場）
第 2 部　侵略的外来生物トピックス
「福島県で確認されたカラドジョウ」稲葉修（南相馬市博物館）
「福島県における哺乳類の外来生物確認事例」大槻晃太 *・佐藤洋司・岩崎雄輔（福島県野生動物研究会）
「福島県における特定外来生物の現状について」佐藤洋司（福島県生活環境部自然保護グループ）
「ジャンボタニシ襲来の危険性」難波謙二（福島大・共生システム理工）
「カエルツボカビ病に関する情報提供のお願い」太田宏（東北大・生命科学）
第 3 部　ポスター発表・パンフレットや駆除マニュアル等配付
ポスター発表
「セイヨウオオマルハナバチの野生化とそれに伴う在来マルハナバチへの影響」横山潤（山形大・理・生物）
「阿武隈川に侵入したフロリダマミズヨコエビ *Crangonyx floridanus*」塘忠顕・嘉納裕輔・斎藤広行 *（福島大・共生システム理工）
「裏磐梯のオオハンゴンソウ問題」金野志穂 *[1]・鈴木佐知子 [2,4]・佐藤真貴子 [2,4]・菊地沙也香 [2,4]・小林星 [3,4]・笹原聡 [3,4]（[1] 裏磐梯ビジターセンター，[2] 福島大・

共生システム理工，[3] 福島大・教育，[4] eco っ子）
「裏磐梯曽原湖・・・外来生物で在来生物相が壊滅した湖」細島尚子*[1]・佐久間美幸[1]・渡辺優樹[1]・安斎（渡辺）智美[1]・黒沢高秀[2]（[1] 福島大・教育，[2] 福島大・共生システム理工）
パンフレットや駆除マニュアル
ブラックバス駆除マニュアル（福島県農林水産部水産グループ・内水面水産試験場）
外来生物関連のパンフレット（福島県生活環境部自然保護グループ）
【一般講演】
ポスター発表（11 月 24 日）
「カムチャツカ半島中部にみられる植生景観」竹原明秀（岩手大・人文社会）
「岩手県南部のオオクチバス生息溜池の魚類相の特徴」○千田揚輔（岩手大院、社会・環境システム専攻）・牧陽之助（岩手大、環境）
口頭発表（11 月 25 日）
「三陸海岸中部の十二神山・霞露ヶ岳に残存する自然林：植生構造、植生地理学的位置づけ、保全価値」○平吹喜彦（東北学院大学）・菅野洋（（株）宮城環境保全研究所）・小水内正明（岩手植物生態研究会）・原正利（千葉県立中央博物館）・富田瑞樹（東京情報大学）・湯浅俊行（日本山岳会）・大上幹彦（宮古市役所）・中村致孝（岩手植物生態研究会）
「水環境の違いが埋土種子より成立する湿地草本群落に及ぼす影響」○田中夏美・林田光祐（山形大・農）
「遷移初期群落を構成する樹木種間の関係：アカマツとナナカマドの例」○横山翔（山形大・院・理工）・村上芳行（山形大・理）・辻村東國（山形大・理）
「早池峰山のコメツガ・オオシラビソ林の 18 年間の動態―とくに稚樹の死亡と加入―」○杉田久志（森林総研・東北）・谷雅人（足利高校）・高橋利彦（木工舎「ゆい」）
「大型植物化石をもちいた猪苗代湖鬼沼埋没林の古植生および古環境の復元」○箱崎真隆・木村勝彦（福島大学），吉田明弘（東北大学植物園），平野信一（東北大学）
「クマガイソウ（ラン科）の生活史と好適環境」○黒沢高秀[1], 伊東英恵[2], 稲田晴奈[2], 清原一樹[2]（[1] 福島大・共生システム理工，[2] 福島大・教育）
会記（2007 年度）
（2）地区委員会
2007 年度定例地区委員会は、2007 年 11 月 24 日に福島大学において開催され、以下の議題について報告および審議がなされた。出席者は以下の 14 名であった。浅見和弘・平吹喜彦・黒沢高秀・中静透・辻村東國・関剛・牧陽之助・成田憲二・清和研二・占部城太郎・木村勝彦・竹原明秀・彦坂幸毅（庶務幹事兼任）・太田宏（会計幹事）
○報告事項
・庶務報告（2007 年 1 月 1 日～ 2007 年 11 月 25 日）
1）2007 年 1 月 31 日　地区会会報第 67 号を発行、発送した。
2）2007 年 2 月 20 日～ 26 日　地区委員会を電子メール上で開催し、投票の結果、2009 年の全国大会開催地を岩手県盛岡市周辺とすることを決定した（賛成 16・反対 0）。
3）2007 年 10 月　第 52 回地区大会および総会の案内を発送した（福島県）。
4）2007 年 11 月　第 52 回地区大会プログラムを発送した（福島県）。
5）2007 年 11 月 24 日　福島大学において地区委員会を開催した。
6）2007 年 11 月 24・25 日の両日にわたって、福島大学において第 52 回地区大会および総会を開催した。
・会計報告
2006 年度決算報告とその会計監査報告、2007 年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。
・その他
2009 年全国大会開催について　牧陽之助大会準備委員長から、会場が岩手県立大に決まったこと、準備委員会の組織などが進んでいる旨が報告された。
○審議事項
・2008 年度予算
2008 年度予算案について説明があった。繰越金に余剰があることと地区大会を盛り上げるために大会援助費・大会活性化費を増額することを承認した。
・各委員推薦
会計監事に酒井聡樹氏（東北大学）、選挙管理委員に鹿野秀一氏・鈴木孝男氏（東北大学）を推薦し、承認された。
・次回・次々回大会について
次回地区大会を宮城県で行うことが報告された。
次々回地区大会は、順序では岩手県だが、2009 年に全国大会が開催されるため、地区大会の開催をスキップすることを了承した。委員会終了後、青森県委員と連絡をとり、青森県での開催の了承を得た。
・2009 年全国大会について
東北地区色を出したシンポジウムの開催を地区会が後押しすることを確認した。
（3）総会
2007 年度東北地区総会は、2007 年 11 月 25 日に開催され、総会議長に木村勝彦氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。
・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。
・2008 年度予算案が原案の通り承認された。
・次回地区大会を宮城県で開催することが承認された。

関東地区会
2007 年（1 月～ 12 月）活動報告
（1）2007 年 2 月 18 日（日）に地区会総会を地球環境フロンティア研究センターにて開催した。
報告：会員動向、2006 年活動報告、2006 年会計報告
議事：2006 年決算および 2007 年予算・活動計画の確認
（2）2007 年 2 月 18 日（日）にシンポジウムを海洋研究開発機構横浜研究所三好記念講堂にて開催した（共催：地球環境フロンティア研究センター）。

テーマ：陸域生態系観測の現在と未来～スケールと技術の壁を越えて
「野外調査･観測のスケールアップについて」中静透（東北大・生命科学）
「衛星観測と地上を結ぶ現地観測―衛星観測による植生バイオマス推定への挑戦―」本田嘉明（千葉大・環境リモセン研究センター）
「植物個体レベルの環境応答から群落・生態系レ機能評価へのスケールアップ―炭素安定同位体を用いた解析―」半場佑子（京都工芸繊維大･生物資源センター）
「有蹄類の生態学研究とスケール」高槻成紀（東大・総合研究博物館）
「シミュレーション研究における観測データの利用」加藤知道（地球環境フロンティア研究センター）
（3）2007 年 3 月 3 日（土）に 27 回修士論文発表会を東京大学農学部・1 号館第 8 講義室および 2 号館化学第 1 講義室にて開催した。
「市近郊二次林における 20 年経過後の植生変化とその要因」大場健太郎（東京農工大・植生管理）
「列状間伐によるヒノキ人工林の林分構造の変化」佐々木啓（宇都宮大・森林生態）
「天然林伐採後のイヌブナ（*Fagus japonica* Maxim.）二次林の更新過程とイヌブナの萌芽再生機構」菊地陽太（宇都宮大・森林生態）
「分布拡大予測モデルと分布適地予測モデルの統合による外来木本種アカギの侵入段階判定」深澤圭太（横浜国大・環境情報）
「山岳の地形および環境がコナラ属樹木の遺伝構造に及ぼす影響に関する研究」大澤隆文（東京大・農）
「乗鞍岳におけるハイマツの生育立地と環境ストレスに関する研究」永野聡一郎（東邦大・植物生態）
「日光戦場ヶ原湿原周辺部の 25 年間の植生変化」奈良遥（東京農工大院・植生管理学研究室）
「日光戦場ヶ原の土砂堆積地における 22 年間の植生変化とズミ林の発達過程」谷川敦子（東京農工大・植生管理）
「遠州灘海岸林における松枯れ後の植生回復過程」伊藤一誠（武蔵工大・環境情報）
「函南原生林における常緑広葉樹林から落葉広葉樹林への林冠優占種実生の発芽・定着数の変化」澤田佳美（東京農大・森林生態）
「大森岳照葉樹林域における樹木の種特性からみた再生自然林形成過程」井上章子（東京大・新領域・自然環境）
「大森岳常緑広葉樹林域における人工林と自然林保護樹帯の群落構造と動態の比較」菊地のぞみ（東京大・新領域・自然環境）
「都市近郊分断林における遷移と木本種の種特性」加藤浩次（横浜国大・環境情報）
「街路樹のフェノロジーとイチョウの受粉特性」高橋創（東京大・森林植物）
「関東平野台地域におけるススキ草地の面的・質的な変化 - 筑波・稲敷台地を事例に - 」小柳知代（東京大院・農・緑地創成学研究室）
「ヨシの塩環境適応に果たす生態的可塑性の役割」田中正之（宇都宮大・雑草科学研究センター）
「小貝川における侵略的外来植物オオブタクサの分布特性と種多様性に及ぼす影響」土方直美（筑波大・環境科学）
「河川敷における帰化植物オオブタクサ（*Ambrosia trifida* L.）の生育に対する人為的撹乱と環境条件の効果」清水静也（茨城大・生態学研究室）
「東京湾小櫃川河口塩性植生と立地環境に与える河道変更の影響」宮本万理子（東京大･新領域･自然環境）
「東京湾富津干潟におけるアマモ場の長期空間動態と空間スケール依存性」山北剛久（千葉大･生命地球科学）
「自然再生事業は何を再生しているのか？―大型ビオトープと里山・河川敷の比較環境科学的研究―」依田優紀（群馬大・社会情報）
「アカマツ林における外生菌根バイオマスに関する研究」岡田慶一（信州大・応用真菌学）
「九十九里浜クロマツ海岸林における地下部外生菌根菌群集の構造と経時変化」近藤那海子（東京大院･農･森林植物学研究室）
「ニセアカシア（*Robinia pseudoacacia*）根粒菌の多様性と空間構造」白石彩水（東京大・森林植物）
「神奈川県丹沢山地におけるササラダニ群集の種多様性とその変化―植生衰退の影響を機軸として―」尾崎泰哉（横浜国大院・環境情報・土壌生態学研究室）
「無尾両生類における跳躍能力の温度依存性」真山春菜（東邦大・地理生態）
「北海道東部浦幌周辺地域におけるヒグマの生息地利用解析および生息地評価モデル構築に関する研究」嶋崎暁啓（日本大・森林動物）
（4）2007 年 3 月に地区会報第 55 号を発行した。
（5）2007 年 11 月 10 日に地区総会を地球環境フロンティア研究センターにて開催した。
報告：会員動向、2006 年活動報告、2006 年会計報告
議事：2006 年決算および 2007 年予算・活動計画の確認
（6）2007 年 11 月 10 日にシンポジウムを海洋研究開発機構横浜研究所三好記念講堂にて開催した。
テーマ：気候変動に伴う陸・湖沼・海の生態系の応答：時系列データの比較からみえるもの
「極東・太平洋域の気候変動：観測事実と将来予測」中村尚（東大・理）
「海洋生態系と北太平洋の十年規模変動」千葉早苗（地球環境フロンティア研究センター）
「湖沼の CO_2 とその食物網への波及効果：生態化学量論と生物多様性の視点から」占部城太郎（東北大･生物）
「森林の種子生産の長期変動―規則性と不規則性―」正木隆（森林総研・森林植生）
2008 年（1 月～ 12 月）活動報告
（1）2008 年 1 月より地区委員会事務局および役員が以下に引き継がれた。
事務局：首都大学東京･理工学研究科･生命科学専攻内
地区会長：可知直毅（会計兼務）、庶務：林文男
（2）2008 年 2 月に地区会報第 56 号を発行した。
（3）2008 年 3 月 1 日（土）に第 28 回修士論文発表会を

東邦大学理学部 3 号館 205 教室および 305 教室にて開催した。
「コガラの食物声は混群の形成を促進する」鈴木俊貴（東邦大・地理生態）
「アカネズミによるオニグルミ種子採食行動：学習効果と遺伝的背景」武智玲奈（首都大・生命科学）
「ショウジョウバエの記憶と学習にもとづく適応戦略: 歩行軌跡モデルと時系解析」堀部直人（東京大・総合文化）
「社会性アブラムシにおける利他行動：繁殖後の成虫と若齢幼虫によるコロニーの協同防衛」植松圭吾（東京大・総合文化）
「オオムラサキの形態的性的二型と生態的特徴との関係」山崎孝平（東邦大・動物生態）
「交尾中のアジアイトトンボにおける雌の精子貯蔵器官内の精子数の動態と交尾器形態」田島裕介（筑波大学・生命環境科学）
「雌に色彩 2 型を生じるアオモンイトトンボの雄が示す配偶者選択」高橋佑磨（筑波大・生命環境科学）
「ヘソカドガイ属 *Paludinellassiminea*（新生腹足上目：カワザンショウガイの分類学的再検討）」多々良有紀（東邦大・海洋生物）
「東日本におけるニホンイノシシ集団の遺伝的多様性」腰塚豊（首都大・生命科学）
「丹沢山地のブナ樹皮に生息するササラダニ群集の多様性評価―ブラッシング法を用いた調査例―」山本圭美（横浜国大・環境生命）
「カラマツ人工林への広葉樹の侵入がササラダニ群集に与える影響」太田藍乃（横浜国大・環境情報）
「都市近郊に生息するノウサギにおける現在と過去のランドスケープの重要性」斎藤昌幸（横浜国大・環境情報）
「多摩川の岩場に分布するユキヤナギの生育地特性と種子発芽特性」芦澤和也（明治大・応用植物生態）
「水分供給の時間的不均質性が植物の成長におよぼす影響の栄養塩量と密度による変化」萩原陽介（首都大・生命科学）
「カシワの個体サイズ・受光量が成長・結実にあたえる影響」梅澤耕一（千葉大・環境計画）
「伊豆諸島におけるウツギ（*Dutzia crenata*）の形態変異について」笛木学（東京農工大・植生管理）
「壁面緑化への利用に向けたタケ・ササ類の生理生態的特性の把握」横道峻平（東京大・新領域創成科学）
「高分解能マルチスペクトルデータを用いた里山地域の植生図化に関する研究」長谷川奈美（東京農工大・植生管理）
「屋久島西部における温度環境と植生の垂直分布帯構造」出本和也（東京大・新領域創成科学）
「北海道西別川における旧河道の乾陸化と陸上植生の変化」阿部亮吾（専修大・地理）
「西表島仲間川におけるマングローブ林優占種（ヤエヤマヒルギおよびオヒルギ）の更新機構」鴨田清志（横浜国大・環境情報）
「ナイロビ近郊林における伐採後の植生動態―伐採痕を用いた攪乱強度・年代の推定―」古川拓哉（横浜国大・環境情報）
「富士山雪崩撹乱跡地におけるカラマツの侵入様式と遷移阻害要因―特に，地下部の環境を中心として―」荻野恭子（玉川大・資源生物）
「茨城県菅生沼での火入れがオギ二次草原の種多様性に及ぼす影響」澤田みつ子（筑波大･環境科学研究科）
「樹木の防火力からみた避難場所の安全性評価」山崎智彦（東京農工大・植生管理）
「多摩川永田地区におけるハリエンジュ林の植生動態」山口善子（東京農工大・植生管理）
「マテバシイの野生化」中島亜利（横浜国大･環境情報）
「タイミンタチバナの個体群調査―北限の樹木の保全―」ルイス・アルベルト・ベガ・イスワイラス（横浜国大・環境情報）

中部地区会

活動報告なし

近畿地区会

（1）2008 年度第 1 回地区委員会の開催
日時：2008 年 7 月 26 日（土）
会場：京都大学大学院理学研究科
出席者:浜端悦治、亀田佳代子、幸田正典、難波利幸、野間直彦、大澤直哉、梅原徹、丑丸敦史、山村則男、遊磨正秀、（事務局）堀道雄、曽田貞滋、渡辺勝敏
議事：（1）引き継ぎ、（2）2007 年度会計報告と 2008 年度予算案の議論と承認、（3）今期のフィールドシンポジウムと例会について、（4）地区委員会用メーリングリストと近畿地区会ウェブページの新規開設について。
（2）2008 年度第 1 回例会の開催
日時：2008 年 7 月 26 日（土）
会場：京都大学大学院理学研究科
プログラム
第 5 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（相川慎一郎氏）
【一般発表】
1）及川真平（京都工芸繊維大・生物資源フィールド科学教育研究セ）「一年生草本オオオナモミの葉群における個葉の寿命と炭素収支」
2）藤田真梨子･前藤薫（神戸大）･松井淳（奈良教育大）･寺川眞理（広島大）・駒井古実（大阪芸術大）・湯本貴和（総合地球環境学研）「ヤマモモキバガの資源利用がヤマモモの果実生産に及ぼす影響
3）米澤信道（京都産業大・理）「京都・大阪に於けるセミの羽化変動とクマゼミ増加説の破綻」
4）鈴木誉保・倉谷滋（理研・CDB・形態進化）「隠蔽擬態した蛾の枯葉模様がもつ適応的なデザイン」
5）奥崎穣（京都大・理）「体サイズ分化によるオオオサムシ亜属の近縁種共存」
6）竹内勇一（京都大・理）「タンガニイカ湖沿岸域魚類群集の垂直分布と持続性：長期センサスから分かってきたこと」

7）山本哲史・曽田貞滋（京都大・理態）「クロテンフユシャクの生態学的種分化：季節適応が生殖隔離をもたらす」

第 6 回日本生態学会近畿地区会奨励賞に、藤田真梨子氏と山本哲史氏の発表が選ばれた。

（3）2008 年度第 1 回フィールドシンポジウムの開催

テーマ：「里山管理のための生態学研究」（共催：龍谷大学　里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター）

日時：2008 年 11 月 23 日（日）

会場：龍谷大学瀬田キャンパスと「龍谷の森」

プログラム

1）宮浦富保（龍谷大学）「龍谷大学瀬田キャンパス隣接林『龍谷の森』の概説」

2）「龍谷の森」散策

3）夏原由博（京都大学）「人工ギャップによる都市林の生態系管理の試み」

4）横田岳人（龍谷大学）「龍谷の森の植物相」

5）谷垣岳人（龍谷大学）「動物相から見た『龍谷の森』～孤立里山林の生態系～」

6）林珠乃（龍谷大学）「虫こぶのタンニンと文化」

7）総合質疑（進行：遊磨正秀，龍谷大学）

（4）2008 年度第 2 回地区委員会･総会･例会の開催（予定）

日時：2008 年 12 月 13 日（土）

会場：京都大学（吉田南キャンパス）総合人間学部

プログラム

地区委員会

総会

第 6 回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式（藤田真梨子氏・山本哲史氏）

【一般発表】

1）河野昭一（京大院・理）「酸性降下物による森林衰退の現状」

2）藤井一至・舟川晋也（京大院・農）「酸性雨は土壌を酸性にしているのか？」

3）後藤龍太郎･岡本朋子･加藤真（京大院･人間環境）「カンコノキ属 4 種の開花・結実フェノロジーとその種子食性送粉者の生活環」

4）鈴木紀之・西田隆義（京大院・農）「『産みの苦しみ』をいかに和らげるか：ウラナミジャノメにおける可塑的な卵形の変化」

5）鶴井香織（京大院・農）「分断色がもたらす捕食回避と配偶成功の拮抗的効果～ハラヒシバッタにおける性に依存した黒紋の意義」

6）小林美苑（奈良女大院・人間文化）「ハクセンシオマネキの左右性の遺伝システムのモデル」

7）稲垣絢子（奈良女大・人間文化）「干潟の蟹の協力の進化の数理モデル」

8）幸田良介（京大･生態研）･辻野亮（地球研）･藤田昇（京大・生態研）「糞塊を用いた簡易で高精度なシカ生息密度推定法の提案」

9）米澤信道（京都産業大･理）「『クマゼミ発生可能地域』の疑惑と真実」

中国四国地区会

（1）第 52 回中国四国地区大会（2008 年 5 月 17､18 日､於：広島大学）

【ポスター発表】（5 月 17 日）

「干潟形状と塩生植物の生育・繁殖の関係：太田川放水路の例」○荒木悟[1]、國井秀伸[1]、陶山俊一[2]（[1] 島根大学・汽水域研究、[2] センター総合技研株式会社）

「低地熱帯雨林におけるフタバガキ科 22 種の生長・加入・生残速度と生育環境の関係」○山田裕子、山田俊弘、奥田敏統（広島大・院・総科）

「岡山県鬼城山の植生―花崗岩地域の地形と植生の対応関係―」○古屋達規[1]、栗林正志[2]、波田善夫[2]（[1] 岡山理科大院･総情･生地、[2] 岡山理科大･総情･生地）

「放棄棚田の復田作業による植生の変化」○兼田侑也、石川愼吾、三宅尚（高知大・院・理・自然環境）

「貴重種の多いため池の水辺の姿―香川県安鹿下池の例―」○貸谷康宏、内田圭、本江美智子、神田由紀、田村徹、森分泰三郎、河本智宏、森定伸、斉藤光男（株式会社ウエスコ）

「礫が植生へ与える影響―香川県讃岐富士の例―」○湊啓翔[1]、尾藤由希子[2]、波田善夫[2]（[1] 岡山理大院・総情・生地、[2] 岡山理大・総情・生地）

「西日本各地の塩生植物群落の植物上の節足動物群集の特性」鶴崎展巨[1]･亀山剛[2]･○福家菜緒[1]（[1] 鳥取大･地域・生物、[2] 復建調査設計）

「鳥取砂丘における海浜性アリジゴク 4 種の分布と生活史」江澤あゆみ・岸本理紗・岡村和紀・梅原将史・○鶴崎展巨（鳥取大・地域・生物）

「四国剣山山系の植生が支えるツキノワグマの植物性餌資源の評価」○伊藤徹・石川愼吾・三宅尚（高知大学大学院理学専攻）

「世界文化遺産厳島神社後背林の保全と利用　2. シカの食圧に耐える植物群」○吉野由紀夫[1]・桝井秀雄[2]・林勝治[2]・関太郎[3]（[1] 東和環境科学、[2] 鈴峯女子短大、[3] 廿日市市）

「宮島の森林植生の遷移に与えるコシダ・ウラジロの影響について―シダはぎ取り実験中間報告―」○坪田博美[1]・向井誠二[1]・黒田有寿茂[2]・豊原源太郎[1]（[1] 広島大・院・理・宮島自然植物実験所、[2] 兵庫県立大・自然・環境科学研究所）

「異なる立地に生育するアカメガシワの植食者に対する食害防御形質の違い」○山尾僚、波田善夫（岡山理科大院・総情・生地）

「広島県東北部における腐朽木生変形菌類の発生環境に対する嗜好性」○原紺勇一・大賀祥治（九州大学生物資源環境科学府・九州大学大学院農学研究院）

「葉緑体 DNA マーカーを用いた宮島の植物の遺伝的多型の検出に関する研究」○毛利智恵、向井誠二、坪田博美（広島大学・院・理学研究科・生物科学専攻）

「パックテストによる簡易土壌分析法」○松岡憲吾[1]、波田善夫[2]（[1] 岡山理科大院・総情・生地、[2] 岡山理科大・総情・生地）

【口頭発表】（5 月 18 日）

「鳥取県におけるオニハマダイコンの西日本初となる

定着記録と県内の分布状況」○清末幸久（鳥取県立博物館）
「マンリョウの生長戦略」髙吉博之、○波田善夫（岡山理科大・総情・生地）
「アカマツ枯死木の腐朽状態に応じた変形菌の発生と種多様性」○高橋和成・波田善夫（岡山理大院・総情・数理環境システム）
「異なる立地に生息したフネミノキの個体群動態（2）弾力性と LTRE」○山田俊弘[1]、ピーター ズイデマ[2]（[1]広島大学大学院・総合科学研究科、[2]ユトレヒト大学）
「岡山県南部の花崗岩地域における地形と植生の対応関係」○太田謙[1]、波田善夫[2]（[1]岡山理大院・総情・数理環境、[2]岡山理大・総情・生地）
「高知県四万十川下流域の河床における樹林化の進行と河川環境との関連性」野村直志・○石川愼吾・三宅尚（高知大学理学部）
「里山のモウソウチク侵入林分におけるリターフォールとリター分解」○小林剛・宗本一平・山本新・多田壮宏（香大・農）
「森林の竹林化が土壌の保水機能に及ぼす影響」瀬本麻衣子[1]、○中根周歩[2]（[1]広島大・総合科学、[2]広島大・院・生物圏科学）
「生物多様性保護のための個体群保護の一成功例―広島県におけるブッポウソウの個体群の保護について―」○飯田知彦（九州大学大学院／広島希少鳥類研究会）

【公開シンポジウム】（5 月 17 日）
瀬戸内地域の人と生物：その過去・現在・未来（世話人：中坪孝之・山田俊弘・古本強・田中克幸・森下文浩・植木龍也）
「江戸時代の林野利用と動植物」佐竹昭（広島大学大学院総合科学研究科）
「夏場の気温がお酒造りに及ぼす影響」奥田将生（独立行政法人・酒類総合研究所）
「瀬戸内海の環境変化と流域圏管理の重要性」山本民次（広島大学大学院生物圏科学研究科）

【総会】
a. 報告事項
庶務報告
地区会員の状況（2008 年 4 月末現在 328 名、昨年度＋5 名）、会費納入率、活動報告
会計報告　2007 年度会計
アフターケアー委員会活動報告（細見谷林道工事、上関原発）
各種委員会報告
b. 承認事項
2007 年度会計決算
2009 年度合同支部大会開催地：高知大学
c. 審議事項
2008 年度会計予算
2010 年度合同支部大会開催地：山口
（2）地区会報 52 号発行（2008 年 6 月）
（3）関連シンポジウムの主催（2008 年 7 月 13 日，於：山口県上関町祝島公民館）
「周防の生命圏」から日本の里海を考える―エコロジカルな人間と自然の共生の証を資源に―（企画責任者：菊池亜希良）
「「周防の生命圏」という考え」菊池亜希良（広島大学大学院国際協力研究科）
「生物相が豊かな周防地域の生命圏」飯田知彦（九州大学大学院）・高島美登里（長島の自然を守る会）
「人と自然が共生する「地域共生型」の離島農業」氏本長一（祝島未来航海プロジェクト）
「「里海」という言葉への警告」向井宏（海の生き物を守る会）
「海の未利用資源、そして「里海」の保全と活用方法」新井章吾（海藻研究所）

九州地区会
（1）地区委員会
日時：2007 年 5 月 19 日（土）
会場：九州産業大学工学部
地区委員：矢原徹一・江口和洋・高宮正之・佐藤仁蔵・粕谷英一・真鍋徹・山本智子（順不同）
（2）地区大会
第 52 回三学会九州支部・地区合同大会
会期：2007 年 5 月 19 日（土）～ 20 日（日）
会場：九州産業大学工学部

【一般講演】（＊は発表者）
「なぜ雌は複数回交尾をするのか？アズキゾウムシを用いた適応的意義の検証」＊桜井玄・粕谷英一（九大・理・生物）
「アカオオハシモズにおける手伝い行動の個体差」＊江口和洋（九大院・理・生物）・浅井芝樹・山岸哲（山階鳥類研究所）
「コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* の音声の発達について」＊船越公威・脇田良美（鹿児島国際大・国際文化・生物）
「ハイガシラゴウシュウマルハシの採餌行動と行動圏利用への野火の影響」＊山下大輔・江口和洋（九大院・理・生物）
「アラムシロガイ *Nassarius festivus* の体サイズの違いから見る採餌生態」＊山本宇彦（九大・理・生物）・逸見泰久（熊大・自然科学研究科・複合新領域科学）
「夏緑林におけるテンの食性の地域差―北部九州と関東周辺―」＊足立高行（応用生態研）・荒井秋晴（九州歯大・総合教・環境）・桑原佳子（応用生態研）
「熱帯産珪藻 *Skeletonema tropicum* の温帯海域での生存戦略」＊山田真知子・香月絵理・大坪繭子（福岡女子大・人間環境）・上田直子（北九市大院・国環工）
「洞海湾の赤潮発生機構と植物プランクトン休眠期細胞の関連について」＊香月絵理・山田真知子（福岡女子大・人間環境）・上田直子（北九市大院・国環工）
「九州南東岸における天然マガキ集団遺伝構造の年級群変動」＊沖本宜音・荒西太士（宮崎大・農・生物環境）
「九州南東岸におけるイタボガキ科カキ類の遺伝生態学的解析」＊飯塚祐輔・荒西太士（宮崎大・農・生物環境）
「開花時間の遺伝的基礎を探る―キスゲ属雑種 F2 の開

花パターン」＊新田梢・安元暁子・矢原徹一（九州大・理・生物）
「キスゲとハマカンゾウでは花粉管の伸長パターンが異なる」＊安元暁子・新田梢・矢原徹一（九州大・理・生物）
「大分県くじゅうタデ原湿原の植生分布と水質特性の関連性に関する解析」＊篠原芳海・伊豫部勉（北九大院・国環工）
「九重タデ原湿原の植生変遷に及ぼす火山性物質の影響」＊中園亜由美・原口昭・伊豫部勉（北九大院・国環工）
【ポスター発表】
高校生研究発表
【特別講演】
高大連携シンポジウム：「高大連携の在り方を探る」
基調講演「高大連携を進めるにあたっての高校生物教育の問題点」
嶺岸勝文（福岡県立福岡高等学校）
パネルディスカッション
パネリスト 嶺岸勝文（福岡県立福岡高等学校）
木庭慎治（福岡県立八女高等学校）

（3）地区例会

第 452 回　4 月 14 日　熊本例会（熊本大学）
「暖温帯に生育する絞め殺しイチジクの結実フェノロジー」大谷達也（森林総合研究所九州支所）
第 453 回　5 月 26 日　沖縄例会（沖縄国際大学）
シンポジウム「外来生物法の盲点：見えない脅威と琉球列島の生物多様性」
「ダニ輸入大国日本〜目にも留まらぬ小さなインベーダーたち〜」五箇公一（国立環境研究所・侵入生物研究チーム）
第 454 回　7 月 7 日　鹿児島（鹿児島大学理学部）
生態学会からの話題提供はありませんでした
第 455 回　11 月 10 日　佐賀例会（佐賀大学）
「有明海湾奥部における貧酸素水塊がマクロベントス群集に与える影響」吉野健児（佐賀大・有明プロジェクト）
第 456 回　11 月 17 日　宮崎例会（宮崎大学）
「日本産モグラ類の地中利用深度の季節変化とその解明に向けて」樫村敦（宮崎大学・農学部・動物生産科学科）
「大淀川と魚たち」神田猛（宮崎大学・農学部・自然共生フィールド科学教育研究センター）
第 457 回　11 月 17 日　熊本例会（熊本県立大学）
「石灰藻とヤドカリの‘偽植食’関係」栗元美代子（九州大・理・附属臨海実験所）
第 458 回　12 月 8 日　福岡例会（九州大学）
「ポリネータによる花形質の選択―ハマカンゾウとキスゲの F1・F2 雑種を使った進化生態学的研究」廣田峻（九州大学理学部生物学科）
第 459 回　12 月 8 日　鹿児島例会（鹿児島大学）
（同時開催　SSH 活動中間報告会）
共催：鹿児島大学理学部生命化学科生命機能講座
後援：鹿児島県高等学校教育研究会理科部会
☆高等学校における生物研究成果発表
口頭発表（13:00 〜）
◎海水分析とプランクトン相からみた鹿児島湾沿岸の環境
鹿児島県立国分高等学校（理数科 2 年生物班）大西敏博・鶴丸能伸・徳重謙也・堀切修馬・渡邉柾貴・荒武健太郎・有馬翔平・小畑友洋・児玉高志・平賀翔大（指導：本村正徳）
◎オトシブミとその寄生蜂に関する研究
鹿児島県立錦江湾高等学校（サイエンスクラブ　理数科課題研究班）蔵満司夢・笹山駿介・秋廣駿・花房愛美・松久保舞優・岩本愛梨・山下志保・泉紗貴（指導：小溝克己）
◎キンチャクアオイの種内変異とその要因
鹿児島県立市来農芸高等学校（生物同好会）坂元友成・南田恭平・丸尾直也・田上真盛・福ヶ野勇樹（指導：久保紘史郎）
☆ポスター発表（14:00 〜）
「スーパーサイエンスハイスクール　中間報告ポスター発表」
☆特別講演（15:00 〜）
島嶼の外来種問題―鹿児島で最近騒ぎになったアフリカマイマイの紹介など
鹿児島大学理学部・地球環境科学科　冨山清升
第 460 回　12 月 8 日　長崎例会（長崎大学坂本キャンパス）
「長崎県諫早市における溜池の自然環境とフロラ II―季節変化の視点から―」＊藤木靖子・金子由紀・中西こずえ（長崎大・環境）・中西弘樹（長崎大・教育）
「大村湾島嶼における蘚苔類のフロラ多様性」＊金子由紀（長崎大・環境）・小林業（長崎大・教育）・中西こずえ（長崎大・環境）・中西弘樹（長崎大・教育）
「大村湾沿岸の海岸植物のフロラと植生」＊中西弘樹・小林業（長崎大・教育）・中西こずえ・金子由紀（長崎大・環境）
「日本でウエストナイル熱を媒介しうるイエカ 2 種の季節消長と吸血特性」＊大橋和典（長崎大・熱帯医学研究所）・津田良夫（国立感染症研究所）・阿部眞由美・川田均・高木正洋（長崎大・熱帯医学研究所）
第 461 回　12 月 16 日　大分例会（大分大学）
「別府市 春木川における微生物について―ケイソウと温泉の関係を探る―」永井聡 他 5 名（大分県立舞鶴高等学校 SSH 課題研究班）
「微生物による浄化作用―ビフェニル分解微生物について―」丸山理沙 他 4 名（大分県立舞鶴高等学校 SSH 課題研究班）
「大分スポーツ公園における里山林の再生―苗木植栽 10 年後の群落組成と構造―」須股博信（日本生態学会会員）
「金鱗湖のオイカワの外部形態の特徴について」大倉鉄也（大分大学教育福祉科学部 4 年）
「大分川水系のシマドジョウの倍数性について」松尾駿（大分大学教育福祉科学部 4 年）

（4）地区会報 52、53 号発行（2007/8/31、12/31）

お 知 ら せ

1. 第 29 回（2009 年）関東地区生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会が下記の通り明治大学において開催されます。この発表会は、本年度修士課程を修了される大学院生に、その研究成果を発表する機会を提供するものです。この発表会では日本生態学会関東地区会の会員・非会員に拘らず発表できます。是非ご参加ください。また多くの方々の御来聴もお待ちしております。

主催：生態学会関東地区会
日時：平成 21 年 3 月 7 日（土）
会場：明治大学生田キャンパス
農学部 2 号館 2-200,2-300
http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/ikuta/campus.html（小田急線 生田駅より徒歩 12 分）
問合せ先：明治大学農学部応用植物生態学研究室気付
2009 年関東地区生態学関係修士論文発表会事務局
住所：〒 214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1
TEL: 044-934-7154　FAX: 044-934-7154
e-mail：kantou_master@yahoo.co.jp

2. 第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ

第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催予定をしております。

大会日程：平成 21 年 5 月 30 日（土）～ 31 日（日）
会場：早稲田大学大久保キャンパス 63 号館
大会役員：
大会会長：逢坂哲彌（早稲田大学理工学術院 教授）
実行委員長：竹山春子（早稲田大学理工学術院 教授）
大会事務局：
〒 162-8480　東京都新宿区若松町 2-2
早稲田大学先端生命医科学センター　早稲田大学　理工学術院　先進理工学部　生命医科学科内
第 12 回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
TEL: 03-5369-7326　FAX: 03-5369-7302
E-MAIL: assoc-marine@list.waseda.jp
懇親会
開催日：5 月 30 日（土）18：00 ～ 20：00
場所：63 号館 第 2 教室
大会の内容
1. 一般講演（口頭発表、ポスター発表）2. シンポジウム（一般）3. 懇親会
＊シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。
発表形式
1. 口頭発表：一般講演は質疑含み 15 分　液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定
一般講演のセッション
1. 微生物　2. 微細藻　3. 海藻・付着生物　4. 魚介類　5. 天然物化学・未利用資源　6. バイオミネラリゼーション　7. マリンゲノム　8. 環境・環境適応　9. その他
発表申込みの締め切り：平成 21 年 3 月 13 日（金）必着
講演要旨の締め切り　：平成 21 年 3 月 31 日（火）必着
事前参加登録締め切り：平成 21 年 4 月 30 日（金）必着
講演申し込み方法
発表希望者は書式に従って、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記（連名の方全員）、演題を明記の上 web 上よりお申し込み下さい。
参加登録方法
参加登録希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、web 上よりお申し込み下さい。
詳細は大会ホームページでご確認下さい。
第 12 回大会ホームページアドレス：
http://www.waseda.jp/assoc-marine/
学会ホームページ：
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/index.html

書　評

安田雅俊・長田典之・松林尚志・沼田真也共著（2008）「熱帯雨林の自然史―東南アジアのフィールドから―」283pp. 東海大学出版会　本体価格 3800 円 ISBN:978-4-486-01773-8

本書は、学生時代から半島マレーシアとボルネオ島の熱帯雨林をフィールドとして研究に情熱を注いできた研究者達の活動の記録である。著者らにとってはまさに研究者としての出発点の記録といえるであろう。これまでの研究成果を、現場での様々な経験と共にわかりやすく紹介している。本書の内容は、研究に取り組み始めた学生や若手研究者に近い目線で書かれており、そのような読者にとっては共感できる部分も多いのではないかと思う。

本書は植物、動物、保全の 3 つの章からなり、各章とも 3 節ずつのシンプルな構成である。それぞれのテーマに関わりの深い著者らによって研究内容が紹介されている。

第 1 章「植物」では、半島マレーシアをフィールドとして、一斉開花、種子散布と葉のフェノロジーに関する研究を扱っている。第 1 節では、東南アジア熱帯林研究のうちで多くの研究者達の関心を惹きつける一斉開花のメカニズムについて、著者らによって明らかになった知見を紹介している。過去の研究では、一斉開花を引き起こすシグナルとして低温や乾燥が見出され、さらにエルニーニョ・ラニーニャやモンスーンといった広域スケールの現象がメカニズムの説明に組み込まれてきた。著者らは、半島マレーシア全域にわたる一斉開花の広域モニタリングと過去の開花記録や気象データから、エルニー

ニョでもラニーニャでもない ENSO ニュートラルと呼ばれる時期に、モンスーンによる季節性が増長されて強い低温や乾燥が発生するという仮説を提唱した。広域モニタリングのため、途中でトラブルに見舞われながらも 10 日間で 4000 km もの道のりを走破したエピソードは圧巻だ。約 100 ヶ所もの森林の開花状況を観察して回るのはさぞ骨の折れる調査だったと思うが、著者らにとっては心躍る旅だったに違いない。

第 2 節と第 3 節ではパソ森林保護区に設置されたタワーによる観測に基づいた研究事例が紹介されている。第 2 節ではタワーや樹上から人工的にフタバガキ科樹木の種子を散布する野外実験を取り上げている。フタバガキ科樹木の翼果の散布距離は短いものの、羽根の部分は散布距離をかせぐためにそれなりに役立っていることや突出木の分布パターンが散布に影響を与えていることが示されている。動物による散布の貢献も大きいようだ。第 3 節の葉のフェノロジーでは、タワー周辺に生育する樹木の、一見シンプルな枝葉のスケッチが重要な基礎データとなっている。開葉によって次第に複雑になっていくスケッチに悪戦苦闘しながらも地道にデータを積み上げていった結果、対象とする樹種の開葉、落葉パターンについて、実生から稚樹段階ではばらばらに振舞っていたものが、やがて高木になると同調していく現象を見出す。

第 2 章「動物」では、ボルネオ島をフィールドとして、森林環境と動物との関係を取り上げている。第 1 節では、ミネラル類を多く含む水や土壌からなるハビタットである「塩場」に着目し、そこを利用する様々な哺乳類の生態の観察を通して、哺乳類の生息環境としての塩場の重要性を述べている。第 2 節では、哺乳類の連続野外観察の例として、世界最小の反芻動物マメジカの生態と行動を取り上げている。長期間にわたる野外観察の結果、条件によって一夫一妻制、一夫多妻制いずれにも変わり得るといったマメジカの社会構造を明らかにしている。第 3 節では、動物による種子散布がテーマである。人為撹乱の影響で森林減少や劣化が進み、本来の種子散布者である大型の哺乳類や鳥類を欠いた森林生態系では、代償的散布者として樹上性のリスやネズミ類が代わりの役目をある程度果たすことを示している。これは多様性の高さを誇る熱帯林の優れた機能のひとつであると見ることができる。しかし、そのような代償的散布者による緩衝能力がどれほど持続できるかは未だ明らかにされておらず、今後の研究が待たれる。

第 3 章「保全」では、森林火災と伐採による人為撹乱が動物相や森林構造に与える影響と森林管理について取り上げている。第 1 節はボルネオ島、東カリマンタンにおいて、森林火災と伐採の影響が異なる 2 つの森林の哺乳類相を比較し、人為撹乱が及ぼす哺乳類相への影響を考察している。撹乱の程度が著しい森林で姿を消した種が明らかになる一方で、そのような森林を好む種もあり、森林火災と伐採の影響は、これらの種の在不在によって特徴づけられるようである。また、森林の人為撹乱の影響を評価するにあたって、種組成だけでなく個体密度を考慮する必要性についても言及している。第 2 節は大型絶滅危惧種であるスマトラサイ、オランウータン、アジアゾウ、バンテンに焦点をあて、ボルネオ島北部のサバ州におけるこれらの哺乳類をとりまく現状を紹介している。また、東南アジアで初めて FSC の認証を受け、持続的な森林管理のモデルとして注目されているデラマコット商業林における取り組みを紹介している。第 3 節では、半島マレーシア、パソ森林保護区とその周辺地域をモデルサイトとして、森林の減少、分断化や森林の空間構造の変化などによる哺乳類相への影響に注目している。モデルサイトではこれまでに大型哺乳類を中心におよそ 4 割の種が確認できなくなっており、森林減少、分断化の影響の大きさをうかがわせる。一方で、孤立した小面積の森であっても一部の哺乳類にとってはハビタットとして機能している側面も示されている。

著者らが述べているように、大部分の森林が伐採など人為撹乱の影響を受けている現状では、多くの野生生物にとっての生息場所は、原生林だけでなく、二次林や商業林も含まれている。それゆえ、二次林や商業林を含めた森林の修復や持続的な管理は、野生生物の保全にとって極めて重要な側面であると認識した。同時に、森林における動物相、植物相や森林構造の評価は森林の劣化の状態を示す指標として重要であることを改めて感じた。これは、地球温暖化緩和策として注目されている REDD（森林減少と劣化に由来する排出削減）に関する取り組みを進めていく上でも重要な側面になることであろう。

本書で紹介されている内容の多くは生態学関連の国際誌や書籍などに掲載されており、内容をご存知の方も多いだろう。それらの成果は、日々の地道なフィールドワークを積み重ねた結果であることに改めて気付かされる。特別高価な機材を使うわけでもなく（タワーにはお金がかかっていると思うが）、毎日基本的な観察の繰り返し。しかし、彼らはそこから様々な現象を見出し、興味深い知見を得てきた。各節の途中や終わりにはボックスやコラムとして、著者らの研究や現地調査に関連した情報や体験談がちりばめられている。長く現地に滞在した著者ならではのユニークなエピソードもある。熱帯林研究を行っている者にとっては「そうそう」と相槌を打つことも多いと思われるが、熱帯林研究の経験のない読者でも関心をもって読める部分であろう。そんな彼らのフィールドでの日常を読者にも感じていただきたい。

著者らは本書のねらいとして「はじめに」に二つのことを示している。第一に 9 つの各論（各節）の内容が有機的にゆるやかに関係していることを読者に感じてもらうこと、第二に著者らのフィールドでの試行錯誤の過程やその中で重要だと感じたことを若手研究者に伝えることである。評者としては、第一のねらいは頭ではわかるものの、感じられるかどうかは若干疑問であった。むしろ、各論間の「ゆるやかな関係性」をそれほど強調する必要はなく、9 つの各論は、単純に個々の研究者が取り組んできた内容の羅列であっても、それはそれで構わないと思ったのである。重要なのは各論のひとつひとつから、熱帯雨林という生態系の神秘さ、大切さや研究対象としてのおもしろさと共に、熱帯林がおかれている現状が読者に伝わっていくことだと感じた。この意味においては、各論の内容は十分に役割を果たしているといえよ

う。一方、第二のねらいは、これはもう文句なしに読者に伝わる、ということが実感できた。熱帯雨林の研究者はもとより他の生態学関連の研究に取り組む若手研究者にとっても、大いに参考になることであろう。また、経験を重ねた中堅以上の研究者にとっても若かりし頃の情熱を思い出し、再び自らの研究を見つめなおすきっかけになる一冊となることを期待している。

（森林総合研究所四国支所　宮本和樹）

日高敏隆監修（2007）「アフリカ昆虫学への招待」285pp、京都大学学術出版会、本体価格 3,000 円、ISBN:978-4-87698-716-0

2008 年 7 月、第 23 回国際昆虫学会議が南アフリカのダーバンで開催された。日本生態学会の会員の方々もこの国際会議に出席され有益な情報交換やアフリカでの昆虫採集も楽しまれたかもしれない。1970 年に中央アフリカのケニアに国際昆虫生理生態学センター（ICIPE）が設立された。そして、1979 年には日本 ICIPE 協会が設立され、これまで 23 名の日本人研究者が ICIPE で研究に従事してきた。これらの研究者の研究成果を中心に、「アフリカ昆虫学への招待」が出版された。本書には、アフリカの環境に適応した昆虫の面白い生態、農民を困らせる昆虫の生態、ヒトの病気を伝搬する昆虫の生態、ヒトと昆虫のさまざまな関係などアフリカ固有の昆虫を材料にした最先端の研究成果が多面的に紹介してある。

本書は 7 部 18 章より構成され、第 I 部の「アフリカ昆虫学への招待」で始まり、「おもしろい昆虫」と題された第 II 部では「カガメガの森にチョウのベイツ型擬態の謎を求めて」、「サバンナにフンコロガシを追って」、「乾いても死なないネムリユスリカ」、「トウモロコシの茎に潜むズイムシの寄生蜂」とアフリカに生息する興味深い昆虫を対象にした最先端の研究が紹介されている。アフリカには数多くの農業害虫が生息し、時にはこれらの害虫の多発により飢饉も生じる。さらに、マラリアなどヒトの健康を害する数多くの衛生害虫も生息している。「農民を困らす昆虫」の第 III 部では、「ササゲとマメノメイガ」、「大発生するバッタと相変異」、「家畜飼養と吸血性アブ類」とアフリカでの重要な農業害虫に触れ、第 IV 部では「ヒトの健康を害する昆虫」として、「リーシュマニア症とサシチョウバエ」、「マラリアと蚊」、「眠り病とツエツエバエ」などヒトにとっての脅威の衛生害虫の研究が紹介されている。さらに、第 V 部では、「ヒトと昆虫とのさまざまな関わり」として、「原虫に冒された昆虫の疾患」、「アフリカの昆虫食」、「作物を昆虫から守る」などの研究に触れられている。第 VI 部では、3 つのアフリカの国際昆虫研究機関が簡単に紹介され、「アフリカ昆虫学の今後」という第 VII 部の「むすび」で本書は終わっている。

本書によると世の中には、さまざまな理由からアフリカという地域が好きな人がいて、そんな人たちのことを「アフリカニスト」と呼ぶそうだ。アフリカニストの間では、「アフリカの毒」とか「アフリカの水を飲んだ者はアフリカに帰る」という言葉がかわされるという。ひとたびアフリカの魅力にとりつかれた人は、またそこを訪れたくなり、実際そこへ帰ってしまうらしい。アフリカは、多くの生物学研究者が一度は訪れてみたいと思う魅力的な地域である。それは、アフリカ固有の多様な動植物が生息していることにも起因している。アフリカでは、これらの多様な生物を材料に独創的な研究を行える可能性があるが、本書は、そのような気を起こさせる書でもあった。本書を読み終え、評者も是非、アフリカを訪れて興味深いアフリカ在来の生物を材料にした研究に従事しつつ「アフリカの水を飲んでみたい」気にさせられた。

本書は、17 章のいずれも簡潔に要点が押さえて興味深いアフリカでの昆虫の研究成果が多面的に紹介されている。それゆえ、どこの章からから読み始めても興味深く読める。これまで、アフリカで生息する昆虫を本書のように多面的に紹介した書物はない。アフリカの昆虫の生態を知るだけではなく、アフリカの昆虫を材料にした質の高い最先端の研究を理解する上でも価値ある書である。本書により「アフリカの毒」に冒される研究者が増加するのを多少懸念するが、是非一読をお薦めしたい。

（安田弘法）

攪乱と遷移の自然史：「空き地」の植物生態学（重定南奈子・露崎史郎編著、北海道大学出版会、2008 年、258 頁、ISBN978-4-8329-8185-0）

本書は、「撹乱」と「遷移」をキーワードに集められた 13 章から成る、オムニバス構成の本である。一口に「撹乱」と言ってもその規模はさまざまだが、主に本書が扱うのは比較的規模が大きいもので、長い時間にわたる植生の変化だ。一定の方向性をもって種構成が変化していくとき、それは「生態遷移」と呼ばれるが、長期的な変化をヒトが直接捉えるのは難しい。3 章以降の各章で紹介されるケーススタディでは、この問題に対して多様なアプローチ―長期観察、クロノシークエンス、古生態学および実験生態学的手法―で迫る様子が記されている。多くの著者による分担執筆であるため、章によって多少トーンが異なることは否めないが、どの章も丁寧に書かれており、全体を通じて読みやすい本に仕上がっていると言えるだろう。

もし、読者が生態学の初学者ならば、火山や湿原を中心とした豊富なケーススタディを通じて、群集生態学の重要な概念を学ぶことが出来る。東京都三宅島や鹿児島県桜島をはじめとする生態遷移の研究（3-5 章）は、生態学を学ぶ過程で必ずどこかで目にするものだ（例えば Begon et al. 2006, p. 480）。また、本書を読み進めれば、遷移の初期段階ではファシリテーション（facilitation）が重要であることに気付くに違いない（3・6・7 章）。連続的に種が置き換わっていく遷移では、負の種間相互作用である「競争（competition）」のイメージが強いかもしれない。しかし、火山のような厳しい環境では、正の相互作用（つまり、ファシリテーション）が重要な役割を持つことが、近年広く認識されるようになった（Brooker et al. 2008）。さらに、近年盛んに研究が行われ

ている菌根菌を介した資源共有についても解説される（6章）。

ただ、本書は撹乱を幅広く扱ったものではない。例えば、森林ギャップのような規模の小さな撹乱や、耕作放棄地で見られる二次遷移は扱われない。また、高山（11章）や砂漠（12章）などの事例も含まれているが、必ずしも遷移に関する話題ではない。

最も残念なのは、「理論」にあまりスペースが割かれていないことだ。1章では、編著者の一人である露崎氏が、自身の研究遍歴を交えて撹乱について楽しく（！）解説しているが、理論に深く踏み込んだものではない。2章では、重定氏らが提案する撹乱の数理モデルが紹介される。撹乱のパタンに応じて共存できる種が変化していく様子が導かれ、撹乱環境における群集動態の捉え方として興味深いが、多くの数あるモデルの一つに過ぎない。多くのケーススタディから全体として何を見出すのかは、読者自身の努力に委ねられている。

引用文献

Begon, M., Townsend, C.R., and Harper, J.L. 2006. Ecology: from individuals to ecosystems, fourth edition. Blackwell Publishing.

Brooker, R.W., Meastre, F.T., Callaway, R.M. et al. 2008. Facilitation in plant communities: the past, the present, and the future. Journal of Ecology 96:18-34.

（ブリティッシュコロンビア大学植物学科　富松裕）

京都大学生態学研究センターニュース
Center for Ecological Research NEWS

京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200（代表), Fax : (077) 549-8201
センター長　高林純示

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp

共同利用委員会からのお知らせ

2009 年度（平成 21 年度）京都大学生態学研究センター 共同利用事業公募要項

京都大学生態学研究センターでは、2009 年度の共同利用事業の一環として以下の内容のものを公募します。

1. 公募事項

(1) 研究会 : 生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会の企画を募集します。

(2) 集中講義 & セミナーおよび野外実習：学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場が限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

2. 開催期日

2009 年 5 月 1 日から 2010 年 2 月 28 日までの期間に開かれるものとします。

3. 採択件数

研究会および集中講義 & セミナー・野外実習、合わせて 5 件程度の採択を予定しています。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる方とします。なお、企画に対して助言可能な本センター教員の受入れ責任者を置くことが条件となります（必ずしも、本センター教員が共同利用事業に参加する必要はありません）。

5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、下記の必要事項を記載した企画書を作成し、郵送、ファックスまたは、E-mail にて直接当センターに提出してください。

必要記載事項：

(1) 申込者氏名・所属先および職・所属先住所・電話・ファックス・E-mail
(2) 研究会、集中講義 & セミナー、野外実習の別
(3) 課題名
(4) 開催予定日時
(5) 開催予定場所
(6) 開催目的および内容の概略（400 字程度）
(7) 参加予定者の一覧 （氏名・所属）
(8) センター内の受入れ責任者

なお、申請が採択された場合、所属機関（部局）の長を通して、正式の研究会等申請書を改めて提出していただきます。

6. 申込期限：2009 年 4 月 3 日（金）必着

7. 企画書送付先
〒 520-2113 大津市平野 2 丁目 509-3
京都大学生態学研究センター 共同利用担当
TEL : (077) 549-8200（代表）
FAX : (077) 549-8201
E-mail : kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
郵送の場合は、封筒の表に「共同利用事業企画書在中」と朱書きしてください。

8. 選考
2009 年 4 月中旬に行います。

9. 所要経費
研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。1 件について 20 万円以内を予定しています。

10. 報告書および論文の提出
（1）共同利用事業終了後、1 ヶ月以内に報告書を当センターに提出してください。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターのセンターニュースおよび業績目録に掲載します。
（2）共同利用事業によって得られた成果を論文等により発表する場合には、京都大学生態学研究センター共同利用事業の援助を受けた旨を論文等に記していただくようお願いします。以下、例文です。
和文：本研究は、京都大学生態学研究センターの共同利用施設を使用して行った。
英 文: The present study was conducted using Cooperative Research Facilities of Center for Ecological Research, Kyoto University.
また、別刷り 1 部を当センター共同利用係宛に提出してください。

この公募内容につきまして、不明な点がございましたら、当センター共同利用担当に御照会ください。

※京都大学生態学研究センター全国共同利用に関する申し合わせ
（1）全国共同利用のセンターとして、生態学及びその関連分野に関し、次の項目について共同利用を実施する。
1）共同研究
生態学の特別研究プロジェクト及び共同研究、個別共同研究
2）共同利用実験施設等共同利用
野外研究施設・大型機器等を利用する実験、研究
3）施設利用（ビジター・システム）
4）研究会・野外実習・集中講義並びにセミナー
5）その他
（2）上記の目的達成のため、必要に応じ招へい外国人学者を受入れ、協力研究員・その他を委嘱することができる。

協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。09 年 3 月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申しあげます。改めて 09 年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は、09 年 3 月 16 日（月）までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。（任期は最大 2 年までで、自動継続はされませんので御注意ください。なお、任期満了予定者には事前に再任の有無を確認する通知を行います。）

申請書の様式はセンター HP（http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/activities/images/gs0607.doc）からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メイルでお送りください。または、同封の申請書に記入のうえ、郵送ないしは Fax でお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

申請書の提出先・問い合わせ先
京都大学生態学研究センター共同利用担当
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
Tel: 077-549-8200 Fax: 077-549-8201

※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ
(1) 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
(2) 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
(3) 協力研究員の任期は原則として 2 年とする。

センター員の異動

・中野伸一氏が、10 月 1 日付けで愛媛大学よりセンターの教授として着任しました。